

利用活性化をめざす図書館サービスのあり方に関する研究 読書推進運動と利用活性化

二宮嘉須彦 鈴木誠 安岡貴美代 山上良子

上記4名の委員による第2分科会は、利用活性化をめざす図書館サービスのあり方をテーマに、調査研究をすすめた。

年をおうごとに利用が低迷している短期大学図書館で、どのような工夫や仕掛けのアイデアが活性化をもたらすのかを考えてきた。

客待ち状態の図書館ではなく、積極的に働きかけるサービスを広げていかないと、学生にとっては魅力ある図書館にならないとの前提で考えた。

各図書館でおこなわれている利用促進のとりくみや図書館サービスの展開が、どう利用者を増やすことにつながっているのか。また、本と学生をむすびつけ効果を与えるにはどのような方策があるのかについて、実際におこなわれている評価ある事例をもとに紹介して、研修会に参加されたみなさんの議論材料を示したいと考えた。

発表要約

1. 「読書推進運動」に関するアンケート集計報告 鈴木誠

事前に日本私立短期大学協会に参加している短期大学単独図書館と、四年制大学との併設図書館に対してアンケートを実施した。その結果が分析され発表された。何らかの「読書推進運動」をおこなっている図書館は少なく、とくに短大単独図書館では91%が実施されていない現状があきらかになった。

実施している図書館では、従来型の読書案内や本の紹介、教員からの推薦図書などが多くみられた。ただ、選書ツアーなどの学生参加型の工夫もめだつ。また、コンテストやコンクールといったイベント性をもたせた取り組みを実施していることが、従来型の枠からはずれた新たな図書館サービスの広がりをみせている。

次に選書ツアーについて、鶴見大学短期大学部の事例が紹介された。市内の書店での本選びは学生に好評のようではあるが、授業時間が詰っている短大生にとってはツアー時間の確保が難しく、どうしてもリピーターに偏ってしまう傾向が問題として残る。

2. 読書感想文コンテスト 目白大学短期大学部の事例を中心に 山上良子

平成23年度に実施している目白大学「読書推進プログラム」について発表がされた。

読書をつうじて文章の読解力と表現力を高め、教養を深めることを趣旨としたプログラムが紹介された。具体的には「100冊の本リスト」と図書館推薦の「+」本を読んで「作品」を提出するやりかたである。

提出された「作品」は審査があり、内容だけでなく学生らしい感性や深い思索が窺えるか、さらに文章に破綻がなく形式が整っているかも審査基準になっている。

審査によって、優秀・一等・二等・佳作へは図書カードが賞として贈られ、選外作であつても参加賞として図書カードが応募者全員に贈られる。

3. 学生に読んでほしい本の紹介 千葉敬愛短期大学の事例を中心に 安岡貴美代
はじめに16短期大学の「本の紹介」に取り組んでいる実施館が紹介された。九州から関西、東北にいたる広い地域の短期大学で、このでの「お薦め本紹介」はおこなわれていることが紹介された。

次に、千葉敬愛短期大学の事例が紹介された。「学生へのおススメ本紹介の小冊子」をつくり、大学生活における「読書の起爆剤」として読書力向上や想像(創造)力の育成をめざす目的での活動として紹介された。

読書を堅苦しく考えず、本はおもしろいのが一番というコンセプトでおこなわれている取り組みといえる。

ただ、読書感想文コンテストや Yomu Yomu 運動といったアイデアで活動継続をしているにも関わらず、あまり発展していないように感じた。理由は、授業と連携せず自主参加型なために参加が激減したり、読書時間の余裕のなさだけでなく文章を書くのが辛いといった現実が壁になっている。

読書活性化には、学生との協働、ポイント制の導入による賞状や賞品の贈呈といった「飴」がヒントになると思われる。

4. 大学生と読書 本を読むという行為の実態を垣間見る 二宮嘉須彦

最近の短大生は、本を「読まないの」ではなく「読めない」のではないか、という問題を提起した。

何年か授業を進めていくなかで、文章の読解にかかわる疑問に気がついた。その疑問を筋立てて考えてみると、「読めない」のではないかと考えざるをえない。

図書館や教員は、学生たちが本を「読まなく」なったとの嘆きが聞かれる。ところどころどうも、「読めるのに読まない」のではないらしいと思うような材料の多さに気がついた。

読書が習慣になっていないから「読まない」のではない。ましてや、そばに本がないから「読まない」のではない。本にしる新聞にしる、そこに書いてある文章が読めないから「読まない」のではないかと思う。つまり、文章を読み理解するのに前提となる必要な知識がないので、結果としてなにが書いてあるのかが解らない。

ということは、読める人と読めない人がいるということになる。読める人には、きっかけや仕掛けをととのえてやりさえすれば、読書が身についていくが、読めない人にとっては目の前に本を持っていても読まない。読めもせず内容を理解できない文章を「読もう」とはしないといえる。

ここに、読書推進や利用活性化を進めようとしている、図書館サービスの問題点と解決点があると考えられる。